

セカンドチャンスとしての海外留学？

ー教育達成のための移動とそのリスクー

芝野淳一（大阪大学大学院）

1. 問題意識

近年、「グローバル化の時代」と「教育不安と教育リスク回避の時代」という二つの波が同時に押し寄せる日本社会の中で、国境を越えて教育達成しようとする人々の事例が散見されている（たとえば、週刊ダイヤモンド 2011、8月号）。彼らは、タフな受験戦争に参加せず海を渡り、身につけたネイティブ並みの英語力を活かして日本の有名大学への進学や一流企業への就職を成し遂げようとするのである。

しかし、このような状況にもかかわらず、これまでの研究では国内の状況のみがクローズアップされ、海の向こうで行なわれる中・高階層の教育戦略を捉えたものはほとんど蓄積されていない。社会変動がもたらす人々の再生産のあり方を捉えることが、階層間格差・不平等のメカニズムを解明するために必要なことであるならば、このような教育的実践の内実を明らかにするとは重要であると考えられる。

以上を踏まえ、本稿では、早期に英語圏へ留学している留学生に対する聞き取りを手掛かりに、早期海外留学の実態の一側面を捉える。

2. 先行研究

海外では、中国、韓国、台湾などの東アジア諸国を舞台に、中・高階層家族の「トランスナショナルな家族戦略」（Waters 2005）の一環として、子どもの教育達成のために海外へ留学させるという事例が報告されている（Zhou 1998、Waters 2006a b、Huang & Yeoh 2005、Chiang 2008、Finch & Kim 2012 など）。

これらの研究は、学歴競争の激化とグローバル化の浸透という二つの波のなかで、海外へ移動することが「有意な位置に至るグローバルな道筋」（Lauder et al, p.65）となっており、高階層の新たな再生産戦略となっていることを主張している。

また、必ずしも海外留学が積極的に選択されているケースばかりではない。Waters（2007）が指摘するのは、学歴取得をめぐる競争が激化する中で国内での教育達成が困難になった高階層の「迂回路」として、海外留学が機能しているという事実である。

しかし、これらの研究の最も大きな問題は、高い教育達成や地位達成を実現させた「成功者」への回顧的インタビューから構成されており、あたかも海外留学がすんなり成功しているように描かれていることである。すなわち、「海外留学→教育リスク回避→エリート再生産」という単線的な「成功物語」を前提に議論が展開されているのである。

一般的に考えて、海外に早期から越境し学歴を取得することは明らかにリスクな選択である。異国の地に移動したからといって必ず学歴を取得できる保証はないし、帰国してからうまく高等教育機関や労働市場に接続される保証もない。加えて、ドメスティックな学歴が確固たる威信を保っており（Kim 2011）、さらに海外留学経験者を積極的に採用したいと言う企業が3割程度（経済同友会 2010）という日本特有の文脈を考慮すると、先行研究の分析枠組みをそのまま踏襲するわけにはいかない。

以上を踏まえ、本稿では先行研究の分析の視点を参考にしつつも、「オンタイム」で早期留学している留学生を対象にし、海を渡って教育達成を模索することの「リスク」をも射程に入れた分析を行う。したがって、明らかにしなければならない問いは、次の二つになる。①どのような経緯で海外留学を選択したのか、②留学中の現在、どのような状況にあるのか。

3. 調査概要

本稿で扱うデータは、2012年2月に実施したグアムでのフィールド調査で得たものである。グアムを調

査地として選定した理由は三つある。すなわち、①日本から最も近い英語圏であり、②教育水準が比較的低い地域であり、留学のハードルは低いが高い教育達成を実現しにくい環境にあると想定されること、③そして、これまで海外の先行研究において取り上げられてこなかったフィールドであること、である。

現地でインフォーマルに知り合った日本人をつたい、合計5名の日本からグアムに移動してきた留学生にフォーマルな聞き取り調査を行った。対象者は、16歳～21歳で、親職業は全員「会社経営」であった。

4. 事例

4-1. セカンドチャンスとしての留学

対象者らは、日本での学歴競争からのエスケープや、教育達成の「失敗」を「やり直す」ために、セカンドチャンスとして留学を位置付けていた。教育達成をめぐる競争からこぼれ落ちてしまった子どもたちの「二回目のチャンス」として海外留学という道が開けていたということが明らかになった。また、留学生の語りに親の意向が色濃く反映されていることを考慮すると、「迂回路」としての留学は、学歴下降回避のための家族の教育戦略として捉えることもできる。

先行研究では、国内で教育達成することが困難になりこうした人々が、その後国内に「復帰」し高い地位を築いていくというルートを示している。では、オンラインで留学を経験している本稿の対象者は、成功への明確なヴィジョンを描けているのだろうか。

4-2. 成功物語の崩壊

対象者が留学を選択した当初に描いていた「物語」は、移動後に変容していた。英語力が思った以上に伸びないことや、勉強についていけず全く学力がついていないことや、時間だけが過ぎてしまい何も「達成」できていないことへの不安などにより、日本に戻ったとしても、本当に日本社会で「復帰」できるかわからないという先の見えない状況が、彼らが移動してきた当初に描いていた「失敗→越境（セカンドチャンス）→帰国後の成功」という物語を少しずつ曖昧なものにしていた。

4-3. 挽回のためのオルタナティブな選択

しかし、日本に戻って進学することが困難になったからといって学業を途中放棄するわけにはいかないし、「今更日本に戻れない」と彼らは語っていた。そこで、「リスクの伴う再転換に賭けて挽回できるかもしれない」（Bourdieu 訳書 2012、p.72）次なる教育達成への道として、日本に戻らずグアム大学への進学に挑戦したり、アメリカ本土に「夢を追う」という形で越境するケースがあった。

このように、留学生たちは、グアムで学生生活を送る中で、日本への「復帰」が困難であることを嗅ぎ取り、セカンドチャンスとして「迂回」してきた当初の「成功物語」を書き換えながら次なる「二回目のチャンス」を模索していることが明らかになった。

5. 考察と課題

本調査では、帰国後に日本社会にうまく接続されそうにない、進学のヴィジョンを描けない、あるいは海外での高等教育機関への進学も困難な留学生の切実な声を聞き取ることができた。これは、トランスナショナルな教育空間の中で、「グローバル・ノンエリート」という新たなノンエリート層が出現している可能性を示唆している。

また、本事例からは、海外に移動しても再生産がうまくいかない中・高階層の人々の存在である。本事例からは、「海外へ移動→日本での成功」という物語を実現していくことが思いのほかハードなことであることが明らかになった。「留学成功者」に対する聞き取りから安直な「グローバル・エリート」論と階層間格差・不平等の再生産を主張してきた先行研究において隠されていたリアリティである。

今後の課題として、対象者の数を増やすこと、グアム以外の場所を取り上げること、帰国子女研究との接合を図ること、日本の階層メカニズムとの関係を深く考察することが望まれる。

（※具体的な分析結果と参考文献は当日に配布する）